

つづけていまだに安定を得てない。日本人による、日本的な文学はまだほとんど現われていないと言った方がよからう。賢治が西欧思想の影響を受けていないというのではない。いま、近代科学その他、賢治ほど近代的な学問を身につけた文学者は数少ないかも知れない。にもかかわらず、彼の文学に真の安定感がそなわり、古典の名に値する作品となり得た

のは何が故であろうか。それは宇宙をつらぬる透明な意志を身につけ、法華経精神に基づく四次元世界の文学を近代日本文学においてはじめて現出させることに成功したからに外ならないであろう。この点にこそ宮沢賢治文学の意義を認めるべきではあるまいか。

行為と迷い

——宮沢賢治原論メモ——

原 子 朗

宮沢賢治が死んでから早くも三十年を過ぎたわけだが（昭和八年歿）、賢治への関心は、こんにち漸く一般にもおよんで来たと言えるようだ。「関心」と言っても、実態はさまざまだから、少くとも、宮沢賢治という名まえを知らない人が少なくなってきた。そして彼がどんな人間だったかを漠然とながら知っている人が多くなってきた——という意味において、つまり「関心」の底辺が広がって来たということであ

る。なまじ底辺が広いと、かえって対象の本質はぼかされ、孤独になってゆく、ということもあるし、「底辺」などまるで持たない、すぐれた存在も少なくないことだから、関心の広さと、その対象の真価とは、本質的に無関係なのだが、それにしても死者が、年とともにひろくその名を呼ばれてくるという例は稀有のことである。おそらく、賢治への関心は、まだこれからいちだんとたかまってゆくだろう。

賢治の研究や、その作品の文学的評価も、客観的にはまだこれからだと言ってもよいのではないか。既に全集も幾通りかあるし、絶対的な思慕や讃仰の書までふくめて、賢治に関する文献もけっして少なくはない。しかし、はつきり言って、賢治の文学史的位置づけはまだなされてはいない。それは小田切秀雄氏も言うように、(「文学」三十二巻、三号「宮沢賢治の文学史的設置設定のために」)賢治が日本近代の文芸思潮からはみ出たところで屹立していることと、賢治の作品の魅力が、そうした位置づけなど問題にしないほど、直接的で強烈であるためではあるが、しかし、わたしに言わせれば、大きく言って、今まではまだ偉大なものを見出したときのいわば讃嘆の過程にあると言えるのであって、やはり、真の評価や研究はこれからと言うことになる。と言うと、史的位置づけだけが、窮極の目標でもあるかのように聞えるかも知れぬが、そういう意味ではない。

賢治の作品が文学史に組み入れにくい、ということとは、「文壇史」的な、项目的な文学史的発想の貧しさ、ということを超えて、わたしたちの「文学」概念そのものの貧しさあるいは大きな錯誤を、証明することになりはしないか、とわたしは考える。少し誇張して言えば、賢治の作品の全貌は日本の「近代文学」の成立を全否定する爆薬を秘めている、という気さえするのである。そう言えばまた、わたしも賢治

崇拜者の一人にされてしまいかも知れない。だが賢治の作品に対する讃嘆なり評価は、否定する場合もそうであるが、単に自足的な対象への密着であってはならない。それでは、Rose is rose is rose is rose …… になってしまいうだろう。肯定は、なにものかへの否定でなければならぬ。真の讃嘆なら、それは本質的なものかへのはげしい否定でなければならぬ。

賢治文学の傑出する理由として、さまざまのことがあげられる。たぐいまれな地方文学だから、信仰と科学と実践が一般に文学的に形象に結晶しているから、あるいはもっと単純に、詩的語彙が無類に豊かで、感覚がおそろしいまでにするどいから、そしてなによりも、日本の社会構造の矛盾の中でみずから燃えつきた自我のはげしさを、そこに感応できるから、等々……。

いずれも正しいし、おそらくそのすべてであるだろう。だが賢治の作品の偉大さを、わたしはもっと単純な理由で考えたい。それは、彼の作品がついにシロウトの作品であったからだと、と考えたい。あるいはこう言ってよい、賢治が偉大なのは、賢治がついに「詩人」でも「文学者」でもなかったからだ、と。(こわっておくが、わたしはことばをもてあそんでいるのではない。)

このことは単純ではあっても、賢治がジャナリズムに毒

されなかったから傑出する作品が書けたのだ……というほど単純ではない。(むろん、それをわたしは否定しないが)さらに臆せず言うならば、彼の文学の偉大さを考えるとき、彼における自然科学的教養も、法華経も、あるいは農民指導者も、こちらの頭におかずとよい、ということをおわたしは言いたいのである。すぐ誤解をといっておくと、彼は熱烈なる信仰家として、実践者として、作品を書いたのではない、ということなのだ。彼は作品の向うに、信仰家、実践者≡宮沢賢治を置いて読む者は、彼の作品を単なる宣伝文学にまで引きおろして読むことになるだろう。(むろんそうして読んでも、わたしの言う意味でそれは文学として偉大だから、宣伝臭など打消してしまし、だからわたしの言いかたが「リクツにすぎない」「とんでもない、文学を宗教にまで高めたところこそ賢治の存在理由があるのだ」といった反論は充分予想できるのだが、わたしは賢治における信仰や実践を否定していいものではさらさらない)

彼は信仰家として、実践者として、作品を書いたのではない、というのとまったく同じ意味で、賢治は「童話作家」として、「詩人」として、作品を書いたのではない。だから、彼は「文学者」ではなかったのだ。——彼の作品がシロウトのそれであった、だから偉大でありえた、とわたしは言うのもそういう意味においてである。

そして、彼は、あえて言うなら、人間として(括弧なしの)、ついにデクノボウとして作品を書いた。書きまくった。そして彼は発見した。宮沢賢治という一人の自我を発見した。そして彼は遺言の中で「あれは迷いでした……」と、自分の書きのこしたものをさして言うのである。彼の作品の愛読者がすっかりさせてしまうような一言を、たとえ彼が不用意に口にしたにもせよ、わたしは、賢治のすべて、全作品全生涯に匹敵する重いことばとして、受けとめたい。そして誠実で、最高に美しい文学者のことばとして。すなわち、かれはこの一言で、はじめて文学者になったのである。偉大な文学者に——。

「迷い」とは、文字どおり迷いとして受けとるほかはあるまい。迷いであつたからには、もはや自分にとつては用のないものだ。もう今は迷つてはいないのだから……。この一言は、賢治が自分の作品が「迷い」以外の、たとえば信仰者の書いた物語として、実践者の残したうたとして読まれることを、みずから拒否していることばとして、受取れないだろう。信仰や実践をもとめる人には、なによりも法華経そのものを読んでもちえばよい……。そして彼は父親に国訳法華経の頒布を、遺言としてつけ加えて死んで行くのである。

彼はもはや迷わず、静かに死んだ。一人の法華経信者として死んだ。迷いのはてに、一人の自我の行きつくところを発

見して、死んでいったのである。

彼の作品は迷い以外の何物でもなかった。彼が信仰に徹してきた、すなわち悟りきった「信者」であつたなら、彼には作品を書く必要はなかつた。もしそれでも書いたのなら、彼の作品は布教のための説話文学に墮するであらう。彼のが高級な説話文学であるとするなら話は別だが、そうではあるまい。そしてもしそうなら、たとえ不用意にも「迷いであつた」とは、彼は言わないだらう。彼は信仰家として作品を書いたのではないことは明瞭である。同じく実践者として書かなかつたことも、同様の意味において明らかであらう。

彼における「修羅」は、誰しもが気づくように、渾沌、不分明のまま、ついにその内容は明かされない。どうして明かせよう。明かすどころか、彼はその「修羅」を発見するためこそ迷い、そして書いたのだから。

彼は誠実に「修羅」をもとめて迷いつづけた。そしてその迷いに、彼は耐えた。誠実に耐えぬいたのである。それが、彼にあつては書くという行為の重さであつた。彼の作品にみなぎるエネルギーは、迷いのはげしき、そして、迷いに耐えるということのはげしさそのものにほかならない。彼の作品に流動するリズム、無限に展いてゆくイメエジは、つねにひとつの力に貫かれている。彼の作品のスタイルが形式の見かけを裏ぎって、異様に重いのはそのためだ。

そして、ついに迷いはとける。彼の遺言において、彼の「修羅」が彼みずからによって発見されたことが証明される。迷いがとけたとき、作品を書く必要はもうなくなつたのだ。それが彼の死の意味である。こうして一人の「文学者」が誕生した。彼は迷いに耐えぬくことで一人の偉大な文学者になつたのである。

日本の近代の「文学者」で、「迷いであつた」という一言を、賢治ほどの重さで、死に臨んで響かせうる「詩人」や「文士」がどれだけいたであらうか。ちなみに、彼と同郷同学の先輩の詩人啄木に、同じことばを吐かせたとしよう。するとそれは賢治ほど重たく響かないばかりか、まるで内容のちがつた「迷い」になるだらう。すなわち、啄木は、作品以前に「詩人」であつた。彼は「詩人」としてうたを書き、詩をつくり、小説を書き、評論を書いた。「詩人」として自我を見世俗を見た。ついに「詩人」の目を失ふことはなかつた。彼における「迷い」は「詩人」としてのそれではかないだらう。

啄木だけではない、近代の文学者たちの実に多くが、「詩人」「文士」として生き、「詩人」「文士」として書き、「詩人」「文士」として死んだ。そうしてそのことは、わたしたちを、「文学」に対する、意外に重大な錯誤にみちびいてはいはしないだらうか。

本稿は実は以上のようなメモになる予定ではなかった。学生諸姉の研究リポウトの中から、わたしのゼミの中心に、本誌に載せるにふさわしいものはないかと読んでゆくうちに、マシなのを選んでみたら、偶然賢治のものが多く、これでは賢治特集のごとき印象を与えるので、しかもそうとられては、どの文も童話に偏しているもので、それが偶然であること、そして賢治の詩について勉強したものでよいものもあつたが枚数が多いために割愛せざるをえなかつたこと——などの断りの文章をつけたがよからうとの編集部の意向を汲んで、そのような文に本稿はなる予定であつた。ところが、書いているうちに、ごらんの通りの、とんでもない「断りがき」なつていってしまったのである。

女子学生に賢治ファンの多いことや、それに実はこの夏休みに学生十五人余りと一諸に花巻を中心に、一週間の賢治行脚をした。竹下教授も御同行下さつて、わたしたちは実に楽しい収穫をえた。またわたしだけ四、五日あちらに残つて、賢治の生活や作品のあとをたどつて、三百枚近くのスライドも撮つた。そのこともついでに、与えられたスペースの許すがぎりりくわしく報告したいと、わたしは思つていた。だが、この賢治行脚の報告だけはわたしのペンが走りすぎて、それが書けなくなつたことを、むしろよかつたと思つている。なぜなら、旅行の報告なら、一諸に行つた学生に書いてもらつたほうが、よいにきまつている。たとえ短い文でもそのほうがよほど生き生きしているにちがいないのだ

から。すなわち、別稿で彼女たちが書いてくれるだろう。ただ、こんな文の末尾で、甚だ失礼であることを顧みず、その節一方ならず御迷惑をおかけした、宮沢清六氏はじめ、花巻南高校の及川賢亮先生、岩手放送の小綿局長、種山ヶ原牧場の及川所長、種々紹介の勞をとつて下さつた青江舜二郎教授、四次元主宰佐藤寛氏の皆さんに、心から御礼を申し上げて、稿をとじたい。

